



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

小中高時代の読書活動に関する体験が成人後の自己認識等に与える影響

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学教育実践研究推進本部 公開日: 2025-01-06 キーワード (Ja): 生きづらさ, 自尊感情, 自己理解力, 読書経験, ETYP: 教育関連論文, STYP: 小学校, STYP: 中学校, STYP: 高等学校 キーワード (En): difficulty of living as widespread distress, self-esteem, Self-understanding, Reading experiences 作成者: 腰越, 滋 メールアドレス: 所属: 東京学芸大学
URL	https://doi.org/10.50889/0002000763

小中高時代の読書活動に関する体験が 成人後の自己認識等に与える影響

The Impact of Experiences with Reading Activities during Elementary, Middle,
and High School Years on Self-Perception and Other Aspects in Adulthood

腰 越 滋*
KOSHIGOE Shigeru

学校教育学分野
School Education

(掲載決定日；2024年9月30日)

(Publication decision date; September 30, 2024)

要 旨

本稿の問題関心は、生きづらさが喧伝され、若年層の自死の増加が看過できない現今の日本社会において、どうしたらその状況を緩和・脱却できるかを考察することにある。自死という最悪の事態を抑止するには、自尊や自己肯定などの自己認識が重要となるはずである。そしてこうした自己理解力は、学齢期の読書経験の多寡が影響を及ぼすのではないかと推察し、成人を対象とした学齢期における読書経験の調査を、2つの仮説のもとに再分析を実行した。

得られた知見として、次の3点を挙げる。

1. 自尊感情に繋がる自己理解力は、壮年層に比して若年層の方が低い傾向にある。
2. 読書層の自己理解力は、非読書層のそれよりも高く、若年層ほど両者の乖離が認められる。
3. 自尊を含む自己理解力は、男女とも加齢するにつれて上昇する。特に学齢期での読書量多群は、どの年齢階層でも自尊を含む自己理解力が高く維持されている。だが、読書低群を含む3群では、30代から50代までの自己理解力得点は高くない。

これら3点は、現代日本社会の問題状況とも思料され、まずは大人世代が自己肯定感を高めることが必要である。その上で、若者に蔓延する生きづらさを緩和・解消する対策を、読書を巡る諸活動を起点に講ずることなどが求められよう。

キーワード：生きづらさ、自尊感情、自己理解力、読書経験

Abstract

The main focus of this paper is to consider how the current situation of widespread distress being sensationalized and the undeniable increase in youth suicides in contemporary Japanese society can be alleviated or overcome. It is presumed that to prevent the worst-case scenario of suicide, aspects such as self-esteem and self-affirmation are crucial. Furthermore,

* 東京学芸大学 学校教育学講座 学校教育学分野

it is speculated that such self-understanding abilities may be influenced by the extent of reading experiences during one's formative years. Therefore, a survey targeting adults was conducted to reanalyze reading experiences during the formative years based on two hypotheses.

The obtained insights are as follows:

1. Self-understanding linked to self-esteem tends to be lower in younger age groups compared to older age groups.
2. The self-understanding of readers is higher than that of non-readers, and the gap between the two tends to widen among younger age groups.
3. Self-understanding, including self-esteem, tends to increase with age for both genders. Particularly, those who read extensively during their formative years maintain higher levels of self-understanding, including self-esteem, across all age groups. However, among the three groups (high, moderate, and low readership), individuals in the low readership group exhibit lower self-understanding scores from their 30s to their 50s.

These three points are also considered in relation to the problematic situation in contemporary Japanese society, highlighting the necessity for the adult population to enhance their self-affirmation. Subsequently, measures aimed at alleviating and resolving the difficulties faced by youth, starting with various activities revolving around reading, are deemed necessary.

Keywords: difficulty of living as widespread distress, self-esteem, Self-understanding, Reading experiences

1. 問題関心

コロナ禍を経て、「生きづらさ」の問題がより喧伝され出してきたように思料される。特に若者の生きづらさについては、議論の俎上に載せられることも多く、例えば山下（2020）は、『朝日中高生新聞』の投書記事と、回答者であるヒヤダインの語りから若者の生きづらさについて分析している。そして新聞投書の頻度などから、生きづらさを第1期「発生期」（1992年～2002年）、第2期「定着期」（2003年～2011年）、第3期「増殖期」（2012年以降）の3期に分け、それぞれの特徴を以下のように概括している（山下, 2020, p.137）。

まず第1期は、個人が抱える、明確に病気とも障害とも判別されない漠然とした状態にある心性。次に第2期は、社会的・経済的・文化的な背景の中で、個人的な問題として収斂させられていた事柄を、あえて「生きづらさ」という用語にのせることによって、社会関係の問題へと連結させる試みが行われるようになった時期。そして第3期は、個人の生き方やありようは多様性が認められるようになっている一方で、依然として社会に存在する「偏見」や「常識」が人々の生き方を脅かし、さらに「自己責任」によってしか解決しえないという風潮、という纏め方である。

第3期に相当する現代、生きづらさの最悪の帰結たる若年層の自死問題が、益々看過できない事態となっている。新聞でもOECD先進7カ国の15～34歳の主な死因として、10万人当たりの死亡者数でみると、日本のみ自殺者が事故死亡者を上回っていることが報道され（常見・清水, 2017）、且つまた『『死にたい』というよりも『生きるのをやめたい』という願望が語られる社会である』（清水, 2021）、などとも論じられる。

この困難な問題状況を緩和・脱却する手がかりを得ることが、本稿の核たる問題関心である。実際、ユニセフ・イノチェンティ研究所の調査報告書（UNICEF Office of Research – Innocenti, ed., 2020 = 日本ユニセフ協会 広報室 訳, 2021）の結果によれば、調査の先進38ヶ国中、日本の子どものみ身体的健康が1位であるにも拘わらず、精神的幸福度は最下位に近い37位という両極の結果になっている（日本ユニセフ協会 広報室, p.11）。即ち、医療・保険制度の充実により、5～14歳の子どもの死亡は、自死ではなく不慮の事故死の方が多く、身体的健康面での日本の優位性は担保されている。だが一方で、精神的幸福度の指標^{インディケーター}としての生活満足感は最下位のトルコに次いで下から2番目であり、加えて15～19歳の10万人あたりの自殺率は、平均値（2013～2015年の3年間）を超え、韓国を上回る7.5を示す（日本ユニセフ協会 広報室, pp.12-13）。

更に、社会的状況におけるポジティブ指標である「困った時に頼れる人がいる」と答える成人の割合は、日本は全体平均値の91%を下回る低さである。反対に、ネガティブ指標である暴力殺人による死亡率は、10万人あたり0.2人（平均2.0人）と調査国中最少である（日本ユニセフ協会 広報室, pp.48-49）。殺人が最少且つ最

も安全な国家と見做されるはずであるのに、何故に日本の若者の自死率が高いのか。それは頼れる人がいないと感じる「生きづらさ」が、社会に蔓延していると推論されるからではないのか。そのように考えると、「自分らしさ」や「今の自分が好き」といった自尊感情にも繋がる自己肯定感が十分にあれば、少なくとも自死という最悪の事態を抑止することに繋がっていく可能性があると思料されるのである。

そこで、「今の自分が好き」「自分には自分らしさがある」などの自己肯定感項目を含む、調査データの再分析は有効であると判断し、本稿で採り上げることとした。ここでは、こうした質問項目を含む国立青少年教育研究機構（NIYE）青少年教育研究センターの委託調査（以下「NIYE2019読書調査」と略記）を再分析していく。NIYEからは、同調査の報告書（遠藤, 2021）が既に上梓されているが、本稿では自己肯定感の質問項目に照準すると共に、読書経験との関係を絡めて分析する。ここで読書経験にも注目した所以は、子どもの頃の豊富な読書活動経験が自尊感情の向上に繋がるとする、読書の効用についての先行知見（NIYE 編, 2013）があるからである。

2. 分析視角と仮説の提示

「NIYE2019読書調査」を分析した遠藤（2021）による同調査の分析知見は、プレスリリースでも結果のポイントが公表されたが（NIYE, 2021）、ここでは特に、紙やデジタルの媒体の別に関わりなく、i「読書をしている者の方が、そうでない者に比べ自己理解力が高」いこと、ii「過去の読書量と現在の意識・非認知能力との関連を分析した結果、どの指標においても小中高の読書量が多い者はそうでない者よりも有意に高く、特に、小中高の読書量が少ない者との間に大きな違いがみられた」こと（遠藤, 2021, p.35）に注目する。というのは、「NIYE2019読書調査」では自己肯定や自尊感情に関わる「自己理解力」が分析に含められているからである。この「自己理解力」は、「今の自分が好き」「自分には自分らしさがある」などの自尊や自己肯定の質問項目を包含した構成概念であり、本稿ではこれを分析視角の中心に定め、読書層と非読書層とでどう異なっているのかを探ることとする。その際、年齢層などの属性項目にも注目した結果、以下2つの作業仮説が導出された。

作業仮説1：自尊感情を含む自己理解力（得点）は、壮年層に比して若年層の方が低い。

作業仮説2：自己理解力（得点）は、どの年齢層でも読書層の方が非読書層よりも高く、若年層ほど両者の自己理解力（得点）に乖離が認められる。

これら2つの作業仮説の導出根拠について説明すると、まず作業仮説1は前述OECD7カ国における我が国の若年層の自殺率の高さより、その背景には若年層の低い自尊感情が存在し、相対的に壮年層の自尊感情を下回ると予測した。次に作業仮説2だが、先の遠藤（2021, p.35）による分析知見 i ii や、次節（3.1.）の①から③の3知見などを踏まえてのものとなる。即ち、豊富な読書経験は高い意識・非認知能力や認知機能に繋がり、それが自尊や自己肯定を包含する自己理解力にも連動すると推測する。

3. 先行研究の検討

3.1. 読書の効用に関する議論

読書の効用に関する議論は縷々見られるが、特に読書と自尊感情の関連に絞って先行研究を探ると、NIYE（2013）や浜銀総合研究所（2017, 2021）などが見いだされる。まずNIYE（2013）では、高校までの子ども時代に読書や体験活動の経験が豊富だと、成人してからの意識・能力が高くなることが、分析結果から示される（①）。具体的には、同報告書の概要リーフレットにおいて「子どもの頃の読書活動は、豊かな人生への第一歩」と銘打たれ、「子どもの頃に読書活動が多い成人ほど、『未来志向』、『社会性』、『自己肯定』、『意欲・関心』、『文化的作法・教養』、『市民性』のすべてにおいて、現在の意識・能力が高い」（NIYE, 2013, p.9）とされる。ただ、読書と「自己肯定」などの自尊感情の関連性は窺えるものの、統計的有意性が明示されているわけではない。

次に浜銀総合研究所（2017）では、「子どもの読書活動の影響」、「意識・行動等との関連性」などの多岐に亘る知見が報告書から見いだされる（②）。更に浜銀総合研究所（2021）では、体験活動の一環として位置づけられた読書が、「自尊感情」、「新奇性追求」、「感情調整」、「肯定的な未来志向」に正の関連性を持つことが指

摘されている（浜銀総合研究所, 2021, p.22）(③)。だが、「外向性」や「心の健康」については、有意な関連性が見いだされているわけではない。

3.2. 若者の生きづらさに関する議論

続いて、若者の生きづらさに関する先行知見についてだが、社会学、心理学、教育学、経済学など社会科学全般の多岐の分野で散見され、種々の要因や影響因子が絡み合う形で議論されている。どのような境遇の若者が生きづらさを感じるかを想起し、それらを類別ごとに列挙すると、例えば i. 発達障害を抱えた者（日置, 2009）、ii. 成功への圧力を含む社会的承認欲求の不全を抱える者（薄井, 2014）、iii. 経済的困窮を抱えた者（日下部, 2023）、iv. LGBTQのような性的少数者である者（草柳, 2001）、v. 進路を含むキャリア選択で苦悩を抱える者（萩原, 2011）、などが挙げられる。

一般に青年期は春秋に富み、人生を最も謳歌できる時期とも考えられる。だが他方で、進学や就職、結婚といったライフ・ステージ上の達成課題が、青年期には幾重にも重なる形で立ち現れる。こうした青年期は、勝見（2005, p.16）によれば、「自分とは何かを明確にして、社会のなかでの自分の位置づけを模索していく時期」（同書・同頁）であり、「自己のアイデンティティの確立をめぐる問題が表面化する時期」（同書・同頁）でもあるという。それ故、一群の若者が生きづらさを感じ、希死念慮⁽¹⁾の感覚を抱くことがあっても奇異ではない。

但し、一見困難とは遠い位相に位置づくかに見える若者にも、生きづらさは看取されうる。例えば遠藤（2014, pp.119-142）は、ナラティブ・アプローチから、優等生や過保護の呪縛により、生きづらさを抱える者の事例を紹介している。

更に、内閣府による『子ども・若者白書』の国際比較調査などからは、コロナ禍以前の段階より日本の若者の自己肯定感や意欲、明るい将来展望などは、何れも相対的に低比率に留まるという指摘がなされる。こうした調査結果を踏まえて、「日本の若者は、諸外国の若者と比べて、自身を肯定的に捉えている者の割合が低い傾向にあるが、日本の若者の自己肯定感の低さには自分が役に立たないと感じる自己有用感の低さが関わっている」（内閣府, 2019, p.2）と、概括されている。

こう見てくると、「生きづらさ」という認識は、最早人口に膾炙しており、その状態をどう緩和し、そこから脱却するかという支援が必要だと分かる。これについては、若者の生きづらさに寄り添う立場で居場所づくりに言及した研究（柳下・高橋, 2019）や、生きづらさの生き方ガイドといった提言（大橋・岡本, 2021）、更には読書療法（bibliotherapy）を含む心理学系からのアプローチ（森田・菅村, 2014）などが上梓されている。

だがここで考えたいのは、若者を中心に蔓延し、希死念慮や最悪自死へと誘う生きづらさに対して、読書経験というものが、どのように関連するかは分明ではないことである。本来であれば、生きづらさを構成概念化し、それを潜在変数とした解析を実行したいが、本稿ではその用意がないため、学齢期の読書経験の多寡が、世代別の成人の自己肯定感・自尊感情にどう影響を及ぼしているかを分析することとした⁽²⁾。

4. 調査データの概要と、分析方法

4.1. 調査データ概要

本稿での使用データは、「NIYE2019読書調査」での採取データとなる。調査時期は2019（平成31）年2月であり、調査対象サンプルは全国の20～60代の男女各2,500名、計5,000名である。調査項目内容のうち、本稿では「小中中期の読書量」の間と、表1.に示す「自己理解力」、「批判的思考力」、「主体的行動力」の間（計15項目）を利用した。

4.2. 分析の方法

性別、年齢階層、高校までの読書量の多寡による「読書層4群」（表6.）という属性項目を独立変数、現在の意識・非認知能力の間から作成の3合成変数（「自己理解力」、「批判的思考力」、「主体的行動力」）（表1.）を従属変数とする分散分析を実行し、2つの作業仮説が成立するかを検証する。

5. 分析結果

5.1. 3つの下位尺度（合成変数）間の相関・平均値・SD

まず表1.に示されるように、現在の資質・能力としての意識・非認知能力を訊ねた問の15項目を、逆転項目化した上で「自己理解力」・「批判的思考力」・「主体的行動力」という3つの合成変数を作成した。これら3構成概念を下位尺度得点とし、表2.に各下位尺度得点の平均値 M と標準偏差 SD を示した。内的整合性を検討するためにCronbachの α 係数を算出したところ、「自己理解力」で $\alpha=.84$ 、「批判的思考力」で $\alpha=.88$ 、「主体的行動力」で $\alpha=.85$ と十分な値が得られた。加えて表2.には、現在の意識・非認知能力の下位尺度間相関も示した。3つの下位尺度は互いにかなり高い正の相関を示した。

表1. 3つの下位尺度（合成変数）の内容

※下記15項目の間は、「あなたは次のことについて、今の自分にどのくらいあてはまると感じますか」として、「1.とてもあてはまる、2.少しあてはまる、3.あまりあてはまらない、4.まったくあてはまらない」の4択で尋ねたものである。これらを逆転項目化した上で、5項目ごとに3下位尺度に合成変数化した。よって各尺度の最大値は4で、最小値は1となる。

下位尺度	質 問 内 容
自己理解力 (1～4)	今の自分が好きだ 自分には自分らしさがある 自分の好きなことがやれていると思う いろいろな考え方の人と接して多くのことを学びたい 自分とは違う考え方や文化をもっと知りたいと思う
批判的思考力 (1～4)	ものごとを順序立てて考えることが得意だ みんなが納得できる説明をすることができる 思い込みで判断しないようにいつも気をつけている 他の人の考えを自分の言葉でまとめることができる むずかしい問題にも集中して取り組むことができる
主体的行動力 (1～4)	分からないことはそのままにしないで調べる いつも新しいことに挑戦している 人任せにせず何でも自分でやっている 人がやりたがらないことは自分から進んでやるようにしている 常に目標を持って行動している

表2. 現在の意識・非認知能力の下位尺度（合成変数）間の相関、平均値、 SD 、 α 係数

	自己理解力	批判的思考力	主体的行動力	M	SD	α
自己理解力	—	.67***	.68***	2.62	0.66	0.84
批判的思考力		—	.76***	2.53	0.68	0.88
主体的行動力			—	2.47	0.64	0.85

*** $p < .001$

5.2. 男女差の検討（ t 検定）と、男女別の相関

ここでは、男女の平均値の違いを検討するために、先の3つの下位尺度得点について、 t 検定を実行した。結果は表3.に示されるとおりだが、「自己理解力」（ $t=-3.882$, $df=4,998$, $p<.001$ ）については、男性よりも女性の方が有意に高い得点を示していた。これに対して「批判的思考力」（ $t=3.488$, $df=4,998$, $p<.001$ ）では、女性よりも男性の方が有意に高い得点を示す。「主体的行動力」については、男女差の得点差は有意ではなかった（ $t=.654$, $df=4,998$, $n.s.$ ）。

表3. 男女の平均値と SD および t 検定の結果

	男性		女性		t 値	
	M	SD	M	SD		
自己理解力	2.58	0.67	2.66	0.66	-3.88	***
批判的思考力	2.56	0.69	2.49	0.67	3.49	***
主体的行動力	2.48	0.65	2.47	0.63	0.65	$n.s.$

*** $p < .001$, $n.s.$; not significant

次いで、現在の意識・非認知能力項目から得た3つの下位尺度間の、男女別の相関係数を表4.に示す。男女とも3つの下位尺度間に正の相関が認められるが、男性の方が全般に相関係数が高い。特に「批判的思考力」と「主体的行動力」の間で.78と、高い相関が認められる。対して女性では、「自己理解力」と「批判的思考力」間、「自己理解力」と「主体的行動力」間の相関係数が、何れも男性のそれらより低くなっている。表3.と併せ考えると、女性は自己理解力において男性を上回り、自身をより理解していると推察される。だが、批判的思考力や主体的行動力との結びつきは、男性に比して弱いと史料される。

表4. 男女別の相関係数

	自己理解力	批判的思考力	主体的行動力
自己理解力	—	.70**	.71**
	—	.65**	.66**
批判的思考力		—	.78**
		—	.75**
主体的行動力			—
			—

** $p < .01$

上：男性，下：女性

5. 3. 2要因（性別・年代）の分散分析

現在の意識・非認知能力の間である15項目から作成した3つの合成変数である「自己理解力」、「批判的思考力」、「主体的行動力」の3概念を従属変数とし、性別（男女の2水準）と年代（20代～50代の5水準）を独立変数とした2要因の分散分析を実行した（表5.）。

分散分析の結果、「自己理解力」と「主体的行動力」について有意な交互作用がみられた（それぞれ $F(4, 4990)=3.03$, $p < .05$; $F(4, 4990)=3.68$, $p < .01$ ）。交互作用が有意であったことから、単純主効果の検定を行った。その結果、「自己理解力」については30代と50代における性別の単純主効果が有意であり（30代は $F(1, 4990)=8.54$, $p < .01$; 50代は $F(1, 4990)=16.57$, $p < .001$ ），30代と50代において女性の方が男性よりも「自己理解力」得点が有意に高くなることが分かった。また、性別における年代の単純主効果は、男女ともに有意であり（男 $F(4, 4990)=12.20$, $p < .001$; 女 $F(4, 4990)=15.12$, $p < .001$ ），両性とも40代に入ってから以降に、「自己理解力」が高まってくることが確認される。

「批判的思考力」については、20代、40代、60代における性別の単純主効果が有意であり（20代は $F(1, 4990)=4.64$, $p < .05$; 40代は $F(1, 4990)=4.28$, $p < .05$; 60代は $F(1, 4990)=7.45$, $p < .01$ ），「批判的思考力」得点については、20代、40代、60代において男性の方が女性よりも有意に高くなっている。また、性別における年代の単純主効果は、男女ともに有意であり（男 $F(4, 4990)=12.40$, $p < .001$; 女 $F(4, 4990)=9.35$, $p < .001$ ），「自己理解力」と同様、両性とも40代に入ってから以降に「批判的思考力」も有意に高まってくることが確認される。

「主体的行動力」については、20代においてのみ性別の単純主効果が有意であり（ $F(1, 4990)=6.81$, $p < .01$ ），「主体的行動力」得点については、20代男性の方が20代女性よりも有意に高い。また、性別における年代の単純主効果は、男女ともに有意であり（男 $F(4, 4990)=8.39$, $p < .001$; 女 $F(4, 4990)=12.74$, $p < .001$ ），やはり両性

表5. 年代と性別による各得点と分散分析結果

年 代	20代		30代		40代		50代		60代		主効果		
	男性 <i>n</i> =500	女性 <i>n</i> =500	男性 <i>n</i> =500	女性 <i>n</i> =500	男性 <i>n</i> =500	女性 <i>n</i> =500	男性 <i>n</i> =500	女性 <i>n</i> =500	男性 <i>n</i> =500	女性 <i>n</i> =500	年代	性別	交互作用
自己理解力	2.56	2.57	2.50	2.62	2.55	2.55	2.54	2.71	2.76	2.83	24.30	15.38	3.03*
	0.73	0.69	0.73	0.68	0.62	0.67	0.64	0.62	0.57	0.59			
批判的思考力	2.49	2.39	2.47	2.47	2.52	2.43	2.61	2.57	2.72	2.61	20.55	12.36	1.21 <i>n.s.</i>
	0.74	0.69	0.73	0.69	0.66	0.68	0.66	0.63	0.62	0.62			
主体的行動力	2.50	2.39	2.39	2.43	2.45	2.37	2.46	2.54	2.61	2.61	17.45	0.43	3.68**
	0.71	0.68	0.70	0.64	0.63	0.64	0.61	0.57	0.57	0.58			

上段：平均値，下段：標準偏差

※データ採取方法はモニターによるインターネット調査で、男女別年代別人数（*n*）は、各500名ずつ計5,000名となる。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *n.s.*: not significant

とも40代に入って以降に、「主体的行動力」得点が有意に高くなる。

以上の結果から、まず「自己理解力」は、女性の方が男性よりも高い傾向にあると言える。次に「批判的思考力」については、男性の方が女性よりも高い傾向を示す。更に「主体的行動力」では、際だった差は20代においてのみ確認され、男性の得点の方が女性のそれよりも有意に高くなっている。

また3つの構成概念に共通して、40代に入って以降でようやく上昇傾向を示し、40代に入る前の年代では低い傾向にあることが確認される。よって現代日本社会には、40代以前の若年世代に「生きづらさ」の感覚が、相対的に強く作動しているものと推測される。

5. 4. 過去の読書量のグループ分けと、性別や年齢階層のクロス分析

今度は、小4から小6、中学生期、高校生期の3期における読書量を5択（1.とてもよく読んだ、2.よく読んだ、3.読んだ、4.あまり読まなかった、5.ほとんど読まなかった）で尋ねた問を援用して、グループ分けを行った。まず3期の読書量の3項目を、「読んだ群」と「読まない群」の2値変数に変換し、これを階層化クラスター分析（Ward法）で分類すると、当初6クラスターが最適と示された（Two Stepクラスターにて確認）。ここで6クラスターの具体を検討すると、小中高一貫して読書量が少ない「小中高少群」1,503人が第1クラスター、小中高一貫して読書量が多い「小中高多群」1,895人が第2クラスターに分類できる。ただ、第3クラスターは高校で読書量が低下しており、第5クラスターでは中高で読書量が低下していた。加えて、第4クラスターは高校で読書量が上昇し、第6クラスターでは中学で読書量が上昇していた。これらを踏まえ、最終的には「小中高少群」（1,503人）、「小中高多群」（1,895人）、「上昇群」（466人）、「低下群」（1,136人）という、4クラスター⁽³⁾にグループ分けした。

続いて、得られた4クラスターと、性別や年代による偏り等をみるため、クロス集計表を作成した。先ず表6.より過去の読書量で、残差分析により「小中高少群」と「（読書量）上昇群」において男性割合が有意に高くなっている。これに対して、「（読書量）低下群」と「小中高多群」では、女性割合が有意に高い。男性は学齢期において、一貫して読書量が少ないか不読傾向にあった人が多いのに対して、女性は一貫して読書をしている人が多い。だが一方で女性でも、中高と長じるにつれ読書から離れる人も一定数いることが窺われる。

表6. 過去の読書量_4クラスターと性別のクロス表

			性別		合計
			男性	女性	
過去の読書量 4 クラス ター	小中高少群	度数	925	578	1503
		クラスターごとの%	61.5%	38.5%	100%
		調整済み残差	10.7	-10.7	
	低下群	度数	492	644	1136
		クラスターごとの%	43.3%	56.7%	100%
		調整済み残差	-5.1	5.1	
	上昇群	度数	285	181	466
		クラスターごとの%	61.2%	38.8%	100%
		調整済み残差	5.1	-5.1	
	小中高多群	度数	798	1097	1895
		クラスターごとの%	42.1%	57.9%	100%
		調整済み残差	-8.7	8.7	

$$\chi^2(3, N=5,000)=170.84, p<.001, \text{Cramer's } V=.185$$

次に表7.からは、残差分析により「小中高多群」と「（読書量）上昇群」において、60代の割合が有意に高い。その一方で、「小中高少群」では30代の割合が、「（読書量）低下群」では20代の割合が、それぞれ有意に高くなっている。小4から中高期までの読書量を尋ねた問では、紙媒体のみならず電子媒体も「本」と捉えて回答者に尋ねているため、20代30代の活字情報採取媒体が紙以外へと多層化してきていることのみが、読書量低下の決定因とは考えられず、相対的若年層において不読傾向が広がったことが窺われる。

表7. 過去の読書量_4クラスターと年齢（ビン分割済み）20代～60代のクロス表

			年齢（ビン分割済み）20代～60代					合計
			20代	30代	40代	50代	60代	
過去の読書量 4 クラスター	小中高少群	度数	275	379	320	288	241	1503
		クラスターごとの%	18.3%	25.2%	21.3%	19.2%	16.0%	100%
		調整済み残差	-2.0	6.0	1.5	-1.0	-4.6	
	低下群	度数	279	217	240	214	186	1136
		クラスターごとの%	24.6%	19.1%	21.1%	18.8%	16.4%	100%
		調整済み残差	4.4	-0.9	1.1	-1.1	-3.5	
	上昇群	度数	84	70	86	93	133	466
		クラスターごとの%	18.0%	15.0%	18.5%	20.0%	28.5%	100%
		調整済み残差	-1.1	-2.8	-0.9	0.0	4.8	
	小中高多群	度数	362	334	354	405	440	1895
		クラスターごとの%	19.1%	17.6%	18.7%	21.4%	23.2%	100%
		調整済み残差	-1.2	-3.3	-1.8	1.9	4.4	

$\chi^2(12, N=5,000)=101.04$, $p<.001$, Cramer's $V=.082$

5. 5. 過去の読書量4クラスターと、現在の意識・非認知能力3尺度の関係

ここでは、過去の読書量4クラスターを独立変数、現在の意識・非認知能力たる3つの下位尺度を（それぞれ）従属変数とする1要因（過去の読書量）4水準の分散分析⁽⁴⁾を実行した。その結果、「自己理解力」、「批判的思考力」、「主体的行動力」の何れにおいても有意な群間差が見られた（自己理解力： $F(3, 4,996)=104.17$, $p<.001$, 批判的思考力： $F(3, 4,996)=112.39$, $p<.001$, 主体的行動力： $F(3, 4,996)=134.6$, $p<.001$ ）。図1.に各群の平均値を示す。TukeyのHSD法（5%水準）による多重比較を行ったところ、「自己理解力」・「批判的思考力」・「主体的行動力」の3概念いずれにおいても、4クラスターの並び順は、小中高多群>上昇群>低下群>小中高少群、という結果が得られた。

やはり小4から高3まで一貫しての多読層は、「自己理解力」はもとより「批判的思考力」や「主体的行動力」も高い得点を示す。反対に、一貫しての不読傾向群は3尺度の平均得点が最も低くなっている。平均値の順でいえば、2番目が上昇群で、低下群よりも高くなっており、読書活動が現在の意識・非認知能力に、正の影響をもっていることが分かる。

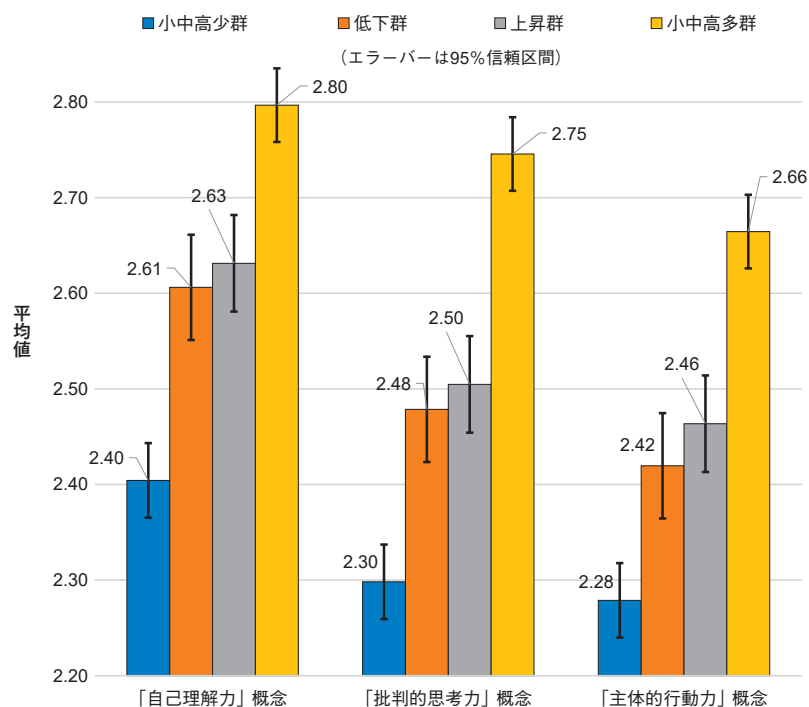


図1. 過去の読書_4クラスターと現在の意識・非認知能力3尺度の関係
※最大値は4で最小値は1（表1.を参照）

5.6. 年齢階層と、過去の読書量_4クラスターの関係

さらに今度は、過去の読書量_4クラスターと年齢階層を独立変数、自己理解力を従属変数⁽⁵⁾とする2要因の分散分析を実行したところ(図2.),「年齢階層」と「過去の読書量_4クラスター」に有意な交互作用が確認された($F(12, 4,980)=2.21, p<.01$)。交互作用が有意なことから主効果の検定を行った結果、従属変数である「自己理解力」について「過去の読書量_4クラスター」では、「上昇」群以外の3群において単純主効果が有意となった(「小中高少」群: $F(4, 4,980)=8.24, p<.001$;「低下」群: $F(4, 4,980)=9.16, p<.001$;「小中高多」群: $F(4, 4,980)=6.00, p<.001$)。また、「年齢階層」においては20代から60代の5世代全てで単純主効果の有意差が確認された(20代: $F(3, 4,980)=28.02, p<.001$;30代: $F(3, 4,980)=31.64, p<.001$;40代: $F(3, 4,980)=14.02, p<.001$;50代: $F(3, 4,980)=19.56, p<.001$;60代: $F(3, 4,980)=12.68, p<.001$)。

以上の結果より、全体に加齢と共に自己理解力は高まる傾向は確認される。だが、小4～高3までの読書量において、小学期に読書量が少なく中高期に上昇した群では、「自己理解力」が30代や60代において上向くものの、有意ではない。その他の群、即ち読書量が小中高で一貫して多い「小中高多」群、一貫して少ない「小中高少」群、中高期に(読書量が)低下する「低下」群では、世代が上がるにつれ自己理解力が高まる傾向が、有意差を以て確認される。

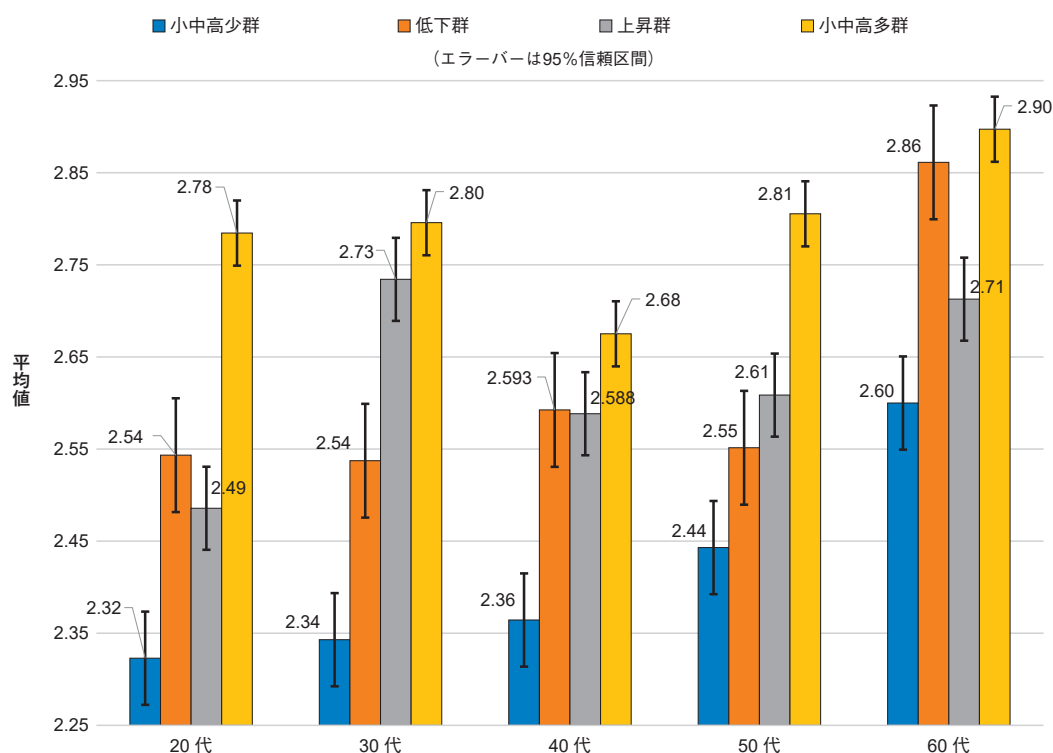


図2. 年齢階層と過去の読書_4クラスターの関係(縦軸は「自己理解力得点」)
※最大値は4で最小値は1(表1.を参照)

5.7. 年齢階層、過去の読書量_4クラスター、性別の関係

ここでは性別での違いをみるために、図2.の2つの独立変数(「過去の読書量_4クラスター」と「年齢階層」)に性別を加えて、3要因の分散分析を実行した。2次の交互作用は非有意であり、1次の交互作用のうち「過去の読書量_4クラスター」×「年齢階層」の交互作用が1%水準有意となった($F(12, 4,960)=2.42, p<.01$)。有意な交互作用が認められたことから、単純主効果の検定を行ったところ、年齢階層の5群の何れにおいても有意であり、過去の読書量_4クラスターにおいては、「上昇」群以外の3群で有意差が確認された。また、主効果については、過去の読書量_4クラスターと年齢階層では0.1%水準有意で、性別は非有意であった。

これらの結果を図示すれば、図3_1.と図3_2.のとおりとなる。ここからは男女で有意差は認められなかったものの、加齢と共に自己理解力が高まる傾向は図2.と同様である。

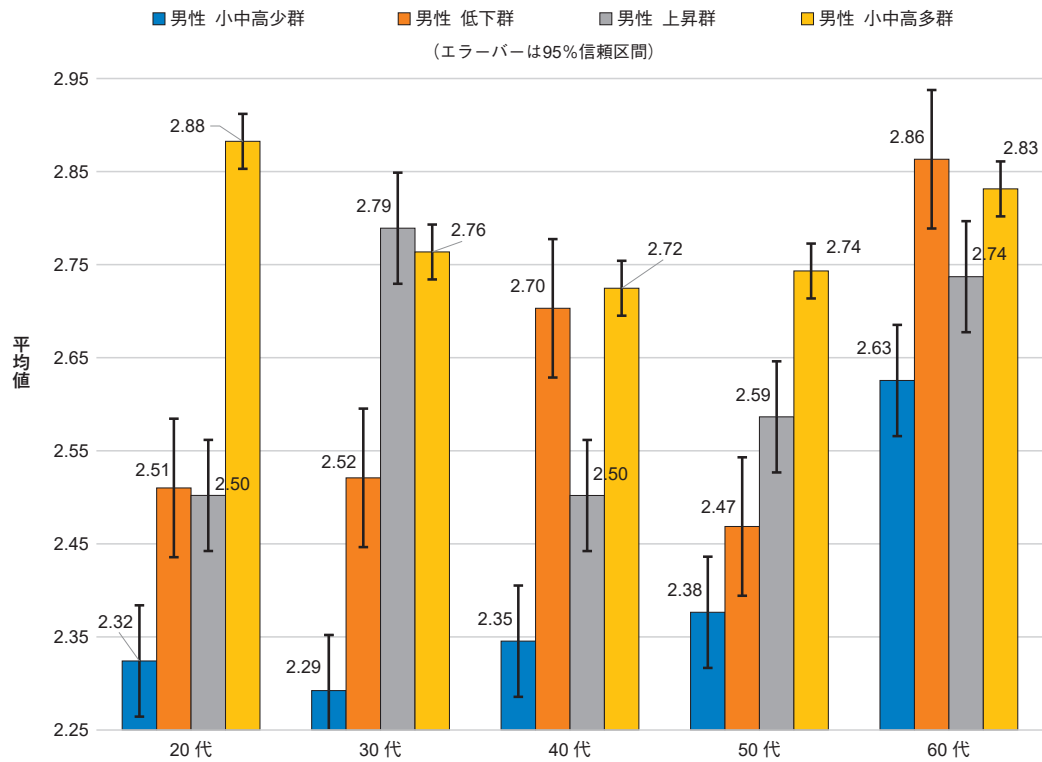


図3_1. 年齢階層と過去の読書_4クラスターの関係_男性
(縦軸は「自己理解力」得点)
※最大値は4で最小値は1 (表1.を参照)

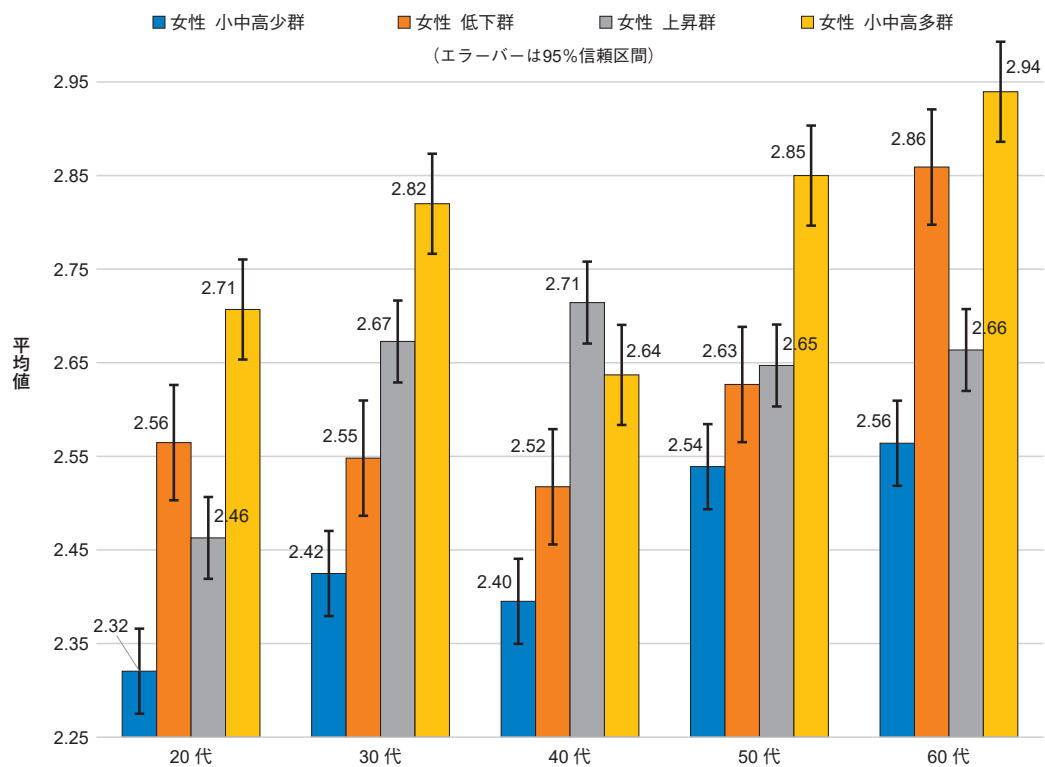


図3_2. 年齢階層と過去の読書_4クラスターの関係_女性
(縦軸は「自己理解力」得点)
※最大値は4で最小値は1 (表1.を参照)

6. まとめと考察

まず本稿で掲げた2つの作業仮説の検証結果について纏める。第1に作業仮説1については、表5.から概ねその傾向が確認された。加えて現在の意識・非認知能力を構成する他2つの概念である「批判的思考力」、「主体的行動力」についても、その傾向にあった。

第2に作業仮説2についてだが、図2.より、概ねその傾向が確認される。やはり若年層である20代では小4期から高3期の過去の読書量が多い層ほど、小中高一貫して読書量が少ない群に比して、自己理解力得点が高い。だが、加齢と共に小中高少群の自己理解力得点が高まるため、両者の差は縮小する傾向が窺える。

続いて、上記の結果を踏まえ、性差についても調べた。従属変数は自己理解力に留まるが、図3_1.と図3_2.において両者の有意差は確認できなかった。過去の読書量_4クラスター群のグラフ形状でいえば、上昇群を除けば女性の方が全体傾向（図2.）に近いようにも見え、必ずしも自尊感情を含む自己理解力が低調というわけではないことが窺える。加えて男性のグラフ形状（図3_1.）でいえば、中高生期に不読傾向になった低下群が特徴的である。この層は、20代30代までは自尊感情要素が低調なものの、様々な社会経験を経ての自己実現の故か、40代で自己理解力が上昇していることが分かる。

以上の2仮説の検証結果、関連しての性別変数追加の考察結果より、学齢期の読書量「小中高多群」において、自尊感情に繋がる自己理解力が高く維持されるという読書の効用が、改めて確認されたと言えよう。即ち本稿での再分析結果からも、「NIYE2019読書調査」の分析知見を追認する結果が得られたものと思料される。

ただ他の3群たる「小中高少群」・「上昇群」・「低下群」に関しては、男女とも30代から50代の勤労期における自己理解力（得点）が上向いてはいない。この点は、現今日本社会の問題状況の1つとは言えまいか。即ち、大人世代を含めた自尊感情や自己肯定を含む自己理解力の向上がまず必要で、その土台が出来てこそ、若者に蔓延する「生きづらさ」が緩和・解消されることに繋がると推測されよう。

更に、本稿冒頭で掲げた我が国の若者世代の「生きづらさ」や自死率の高さの問題に関しても、大人世代たる30代から50代の自尊感情や自己肯定感の低さと、無関係とは言えないと思料される。このことに関連して、内閣府による2回の調査を分析した加藤（2019）は、日本の若者の自尊感情は、他国の若者に比して2回の調査結果とも低いことを指摘しつつ、「日本の若者においてのみ、自己有用感という他者にとって自分がどう役に立つかという要因が関連していた」（加藤, 2019, p.161.）と述べる。加えて、外国の若者は己のありようが自身の満足感を規定するが、日本のみ自己有用感が加わり、「この自己有用感と自分への満足感が比較的強く関連するという自尊感情のあり方は、日本の若者に、ある程度世代をこえて共通する特徴であると考えられる」（加藤, 2019-, p.162）と考察する。つまり、他者ひいては社会に有用か否かが自己満足に繋がり、それが自尊感情を規定するということである。そして他者からの評価が基軸にあるからこそ、20代はもとより50代までの大人世代まで、日本人は自尊感情が上向かない「生きづらさ」を抱えることになる。

したがって他者にとって自分が役立つかとか何ができるかとかではなく、人の評価を気にしない自尊や自己肯定を含む自己理解力を高めることが、生きづらさを巡る問題状況を脱却する方途の1つに繋がると思料される。そこに本稿での知見を加味すれば、学齢期の読書量が自尊感情を引き上げ、延いては生きづらさの緩和に寄与する可能性が示唆されたといえよう。無論、量のみならず読書の質にも目を向け、年齢や発達段階はもとより、読者の興味や関心に即した上での個別に最適な選書⁽⁶⁾というのが検討され、自尊感情や自己肯定感を高める書への向き合い⁽⁷⁾についての熟議も求められるといえよう。

付記

本研究は、国立青少年教育研究機構（NIYE）青少年教育研究センター委託調査『子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究』のデータに関して、同センターの許可を得て、筆者が再分析させて頂いた。記して謝意を表したい。

注

- (1) 自殺念慮という場合、強い自殺願望の思考や観念が精神全体を支配し、それが長期間にわたり持続するイメージであるのに対し、希死念慮の方は、思考あるいは観念として自死が散発的に出現するイメージである。希死念慮の具体的な表現型としては、「生きるのを止めたい」、「消えてなくなりたい」、「楽になりたい」などになる。
- (2) 読書活動の多寡（x）から自己肯定感（y）へ因果のパスを想定した際、構成概念としての生きづらさ（z）はyの背後に存在するイメージで、yが上がればzが下がる、即ち生きづらさが緩和されるものと思料する。なお、xからzへの因果の分析は、他日を期したい。
- (3) 4クラスターの命名は遠藤（2021, p.22）に倣ったが、グループ分け過程の違いより、4つのクラスターの人数配分結果は異なっている。必然的に表6～7.のクロス表結果も、遠藤による分類結果（同書, p.23）とは相同ではない。だが本稿では、グループ分け過程を重視し、表6～7.に見られる4クラスターの人数配分結果を採用した。但し、カテゴリーから過去の読書量4クラスターを抽出したため、4クラスターのサンプルサイズが不均衡になっているという憾みは残る。この点を修正した再分析については、他日を期したい。
- (4) 年齢を共変量とする共分散分析（ANCOVA；analysis of covariance）の実行も考慮したが、共変量の独立性、回帰直線の平行性および有意性というクリアすべき3つの前提条件を満たせぬため断念した。また、複数の従属変数を同時投入して分析できる多変量分散分析（MANOVA; multivariate analysis of variance）の試行も考えたが、（4つのクラスターサイズの不均衡も相俟って）、多変量検定内の分散共分散行列の等質性検定において有意差が確認されたため、実行には至っていない。
- (5) 従属変数には、他に「批判的思考力」と「主体的行動力」の2尺度が考えられるが、図1.において3尺度の形状が類似していること、本稿での主要関心事である自尊感情項目に最も近いのが「自己理解力」尺度であることに鑑み、本稿では「自己理解力」のみを従属変数とし、分析を進めた。
- (6) 現代はテキスト生成AIのChat GPTの進化も著しく、使い方に留意すれば、デジタルを援用した選書すら可能になってきた。また読書媒体も、電子書籍やオーディオ・ブックをも含めて広がっていくと予測される。
- (7) 自尊感情や自己肯定感を高める読書活動の内実については、別途議論の余地がある。だが、例えば中島・村中（2021）による絵本の「読み合い」の実践記録は、女性刑務所内での矯正プログラムという特殊なものでありながら、生きづらさという閉塞感に風穴をあけ、プログラム受講受刑者の自己肯定感を快復させる取り組みとしては、参考になる実践である。

引用文献

- 遠藤野ゆり, (2014), 「ナラティブから読みとく生きづらさ」, 大塚類・遠藤野ゆり 編著, 『エピソード教育臨床 生きづらさを描く質的研究』, 創元社, pp.119-142.
- 遠藤伸太郎, (2021), 『「子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究」報告書』, NIYE 青少年教育研究センター。
- 萩原俊彦, (2011), 「大学生のキャリア選択における動機とパーソナリティ特性との関連」, 『東北学院大学 教養学部論集』 第158号, pp.1-13.
- 浜銀総合研究所 編, (2017), 『子供の読書活動の推進等に関する調査研究 報告書』, 平成28年度文部科学省委託調査。
- 浜銀総合研究所 編, (2021), 『青少年の体験活動の推進に関する調査研究 報告書』, 令和2年度文部科学省委託調査。
- 日置真世, (2009), 「困難を抱える子ども・若者とその家族への地域生活支援の意義と今後への提言～支援実践を通しての分析と検討」, 『子ども発達臨床研究』 第3号, pp.45-53.
- 勝見吉彰, (2005), 「自殺の力動的理解」, 石田弓 編著, 『(シリーズ 荒れる青少年の心) 自己を追いつめる青少年の心—自殺の心理—発達臨床心理学的考察』, 北大路書房, pp.11-17. (第1章・第2節・第2項 所収)。
- 加藤弘通, (2019), 「自尊感情の発達の推移とその関連要因の変化」, 内閣府 編, 『平成30年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』, pp.149-164. (第3部 所収)。
- 国立青少年教育振興機構 (National Institution For Youth Education; NIYE) 青少年教育研究センター 編, (2021), 『「プレスリリース」子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究～「読書離れ」の実態と、「読書好き」を育てるヒント～』。

- 日下部元雄, (2023), 『若者の貧困を拡大する5つのリスクーその原因と対応策ー』, 晃洋書房。
- 草柳千早, (2001), 「現代社会における「生きづらさ」と「アイデンティティ」: 生き方の多様性と社会」, 『三田社会学』, No.6, pp.51-65.
- 森田晴香・菅村玄二, (2014), 「詩の黙読が感情状態と気晴らしに与える効果」, 『心理学研究』, 第85巻5号, pp.437-444.
- 中島学 (著)・村中李衣 (編集), (2021), 『女性受刑者とわが子をつなぐ絵本の読みあい』, かもがわ出版。
- 内閣府, (2019), 『令和元年版 子供・若者白書 (概要版)』。
- NIYE 編, (2013), 『子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究報告書』, NIYE 青少年教育研究センター。
- 大橋史信・岡本二美代 共著, (2021), 『不登校・ひきこもり・発達障害・LGBTQ + 生きづらさの生き方ガイドー本人・家族の本音と困りごと別相談先がわかる本』日本法令。
- 清水康之, (2021), 「[オピニオン&フォーラム] 生きるのをやめたい国」, 朝日新聞, 令和3年4月13日, 13頁 (オピニオン欄)。
- 常見陽平・清水康之, (2017), 「[オピニオン&フォーラム] 若者の命 守るために ニッポンの宿題」, 朝日新聞, 平成29年6月24日, 15頁 (オピニオン欄)。
- UNICEF Office of Research – Innocenti, ed., (2020), *Innocenti Report Card 16 Worlds of Influence Understanding What Shapes Child Well-being in Rich Countries*. (= (2021), 公益財団法人 日本ユニセフ協会 広報室 訳『イノチェンティ レポートカード 16 子どもたちに影響する世界 先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か』, 公益財団法人 日本ユニセフ協会)。
- 薄井明, (2014), 「承認の社会学的理論に向けてー「生きづらさ」の分析のためにー」, 『北海道医療大学 看護福祉学部 紀要』, No.21, pp.13-27.
- 山下美紀, (2020), 「若者たちの生きづらさー「朝日中高生新聞」投書記事と回答の語りからー」, 『ノートルダム清心女子大学紀要 外国語・外国文学編, 文化学編, 日本語・日本文学編』, Vol.44 No.1 (通巻55号), pp.131-144.
- 柳下換・高橋寛人 編著, (2019), 『居場所づくりにいま必要なこと 子ども・若者の生きづらさに寄り添う』, 明石書店。